十四歳のエンゲージ

谷村志穂

Shiho Tanimura

｜著者｜谷村志穂　1962年、札幌市生まれ。北海道大学農学部で動物生態学を専攻。1990年『結婚しないかもしれない症候群』（主婦の友社）がベストセラーに。以後、作家活動に入り主著に『蜜柑と月』（角川書店）、『眠らない瞳』（講談社）、『自殺倶楽部』（集英社）、『ナチュラル』（幻冬舎）、『僕らの広大なさびしさ』（ベネッセ）などがある。

十四歳のエンゲージ
谷村志穂
© Shiho Tanimura 1995

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1995年4月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版———豊国印刷株式会社
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。（庫）

ISBN4-06-185928-5

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

十四歳のエンゲージ

谷村志穂

講談社

目次

十四歳のエンゲージ　5
あとがき　186
解説　松本侑子　188

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

十四歳のエンゲージ

1

人間の皮膚というのは、よくよく見てみるとまるで魚の鱗のようなのだなと私は思った。自分の手の甲をそんなにまじまじと見つめてみたのは生まれて初めてのことだった。右手の指の腹で、左手の親指の付け根のあたりを触ってみる。柔らかで、すべすべで、透き通るように白かった。

私は何を始めようとしているのだろう。

今から始めようとしていることを思うと、腹の下のあたりから重たい澱みのようなものがこみ上げてくるかんじだった。腰のあたりが生温かい微熱を孕み、疼いてくる。

四十二人の教室の、前から七列目、いちばん窓際の席。

隣の席はルー。この席を確保するために、私とルーはこの一年でいちばんたくさんの努力をしたんじゃないだろうか。席がえのくじにインチキな細工を施し、インチキを指摘されて

もがんとして引かなかった。だけど誰ひとり、表立って文句を言ったりはしなかった。表立っては何も言わずに、陰口ばかり叩いてる。

私はこのクラスのなかで、ルーのことしか信じていない。

だけどそのルーは、もう三日も学校を休んでいる。きっとまた、手稲山の麓の、あの傾きかけた平屋の、ぐちゃぐちゃにちらかった自分の部屋のなかで、ただぼんやりと、一日中座っているに違いないのだ。ルーのいる場所はいつもぐちゃぐちゃに散乱してしまう。ルーには片付けるということの意味がよくわからないのだ。そのくせ世話好きで、元気のいいときは学校のなかを走り回っている。

ルーにはたくさんの友達がいた。私にはルーしかいなかった。

だけど元気のないときのルーのことを、私の他に誰が知っているだろう。

私しか知らない。私とカツヤしか知らない。

私しか知らないのに私には何もしてあげることができない。だから元気のないルーのことを考えるとき、私はきまって気持ちが重くなった。今も、さっき食べたばかりの弁当のケチャップのついたソーセージが腹のなかで居心地悪くうごめいているような気がしている。

ルーに何もしてあげることなどできないくせに、私はルーがいないと何もできなくなってしまう。私はこの学校のなかでずっとひとりきりになってしまう。弁当を食べるときも、体操で着替えるときも、帰り道も、どの時間もひとりきりだった。

窓の下のスチームが、またかんかんと音をたてだした。

窓はスチームの水蒸気で白く曇っている。外の景色は真っ白だが、それが雪のためなのか水蒸気のためなのか、ぼんやりしてよくわからない。雪が見えないのは、今日みたいな日の私には救いだった。

雪は苦手だ。意気地のない自分のことばかりを思いだす。

ひとり、ふたりと屋根の上から助走をつけて大きくジャンプして、積もったばかりの新雪のなかにずぼっと音をたてて埋まっていく子供の頃の遊び。互いの勇気を試すための秘密の遊びに、私はいつも怯えていた。

私は意気地なしなんかじゃない、確認するように窓から目をはずす。

机の下で手をごそごそ動かしながら、今日こそルールに従うんだ、約束を果たすんだ、と私は決めていた。腰骨にひっかけるようにしてはいているスカートの脇から、留めてある大きな安全ピンを外す。赤ん坊のおむつや何かを留めるための安全ピンなのだろう。ピンの頭の部分には水色のガチョウのような絵がついている。

ピンは蛍光灯の明かりを受けて、鈍く光った。ピンの針先を右手に持って、左手の親指の付け根に当ててみる。

すでに傷も癒えようとしている薄茶色のみみず腫れ。うっすらとなぞられた、カツヤの三文字。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もう一度、ゆっくりとなぞってみる。みみず腫れになったかさぶたは簡単に剝がれ、すぐにうっすらと血を甦らせ、肉を隆起させて腫れ上がってくる。

どうしてこんな名前を彫らなければならないんだろう。

透き通るような肌に、どうしてこんな間が抜けた名前を彫らなければならないんだろう。

カツヤの歯並びの悪い、お調子者の顔が浮かんでくる。吊り上がった目、中肉中背のどうってことのないシルエット。硬くて真っ黒な、私とそっくりの髪質。カツヤの姿は、猿の真似をしてよく笑われているＴＶの三枚目俳優のそれに、よく似ていた。おまけにいつもへらへら笑っている。

私は誰でもよかったのだ。グループの女になれるのなら、カツヤより下っ端の北村でも岡田でもよかったのだ。だが私を選んだのはカツヤだった。

今、この同じ時間、上の階の教室では冴子さんが同じように窓の外でもながめているはずだ。

冴子さんの、白いだけではなく、長く伸びた指。親指の付け根には、深く濃く彫られたシュウの文字。薬指には十八金の細い指輪。いつも自信ありげに泳がせているその手。

低くハスキーな冴子さんの声を、私は確認するように思いだした。

初めて冴子さんと会った日、カツヤの部屋で、染みだらけの毛布を敷いたコタツに制服のまま足を入れながら、冴子さんはシュウの隣で笑っていた。冴子さんはいつもその左手に上

手に煙草を挟んでいる。そして、シュウの情婦みたいに、シュウに寄りかかりながら言ったのだ。

「やめときなよ。マツナガには似合わないよ。いい子でいなよ。だいたいあんたはそんなきちんとした名前をつけてもらってるじゃない、多恵子なんてさ。いかにも親がちゃんと期待してつけてくれた名前じゃない。ね、シュウ」

私はいつだって冴子さんの前に出ると畏縮する。同じ年なのにそもそも冴子さんと呼んでいるそれだけで、すでにわかってしまうようなふたりの関係だった。ルーも同じように冴子さんのことは冴子さんと呼んでいた。だけどルーはもう少し自由にふるまっている。ルーは誰の前でも哀しそうに笑っているばかりだから、冴子さんの前でもとりたてて変わりはないのだ。

私はおそるおそる言葉を返す。

「じゃあ、冴子さんの名前は違うの？」

「この名前？　親父が好きな女優の名前。ほら、いるだろ。人前で平気で裸になるような女。だから娘がこうなったんだよな。あたしたちの名前なんてみんな適当につけられてんの。ルーの名前なんてさ、あんたどうしてついたか知ってる？」

私は、黙って首を横に振った。

「ほんとうは留美だったんだよ。なのにルーんとこ、おふくろ役所に行ったとたん漢字忘れ

たんだってよ。あわてちゃって、辞典も調べなかったんだ。だからひらがなだけの名前。それで、るみ。商売女の名前じゃないんだから、るみ、なんてガキにつけるなってのね、ル―」

ルーはぼんやりと窓の外に目をやり、笑っていた。屋根からは氷柱がサメの歯のように並び、ぶら下がっていた。ルーにはきっとそれがおかしかったのだ。

カツヤもへらへら笑って会話に加わった。

「俺なんかよ、勝っていう字を親父がどうしてもつけたかったんだってよ。ヤクザもんだからね、あのオッサンは。人生の基本が勝つか負けるかしかないの。そういうわけで息子はこんなふうに単細胞になっちゃったわけよ。まあ、人生面倒くさくなくていいけどね」

カツヤの父親は、頑丈な身体をした土建屋だった。カツヤのことを、ひどく可愛がっている。そのことを、みんなはよく知っていた。

冴子さんが、ふたたび言った。

「シュウの名前なんて最高よ。あたしシュウのママに聞いたことあんの。そしたら笑って言ってた。あらあ、私、シュークリームがいちばん好きだからつけちゃったんじゃなかったかしら、だって。大笑いだよね」

シュウはこたつのなかに身体をもっと丸めるようにして、下を向いて仕方なさそうに笑った。

「関係ないじゃないか、名前なんて、な」
私の方を向いて言った。
私は目だけでウンとうなずいた。それが精一杯だった。シュウと話すのはそれが初めてで、心臓が飛びだしそうなくらいに緊張していた。それがみんなにわからないように、一所懸命、カツヤの部屋のベッドの上にはってあるCAROLのポスターに視線を合わせる。
斜に構えた彼らの顔があんまりまじめに気合いを入れているから、私にはそれが、少しおかしい、と思えてしまう。おかしいと思うことで、うわずっている自分の緊張を解くことができるような気がした。
冴子さんも軽く「まあね」と言った。「好きにしなよ」とも言った。
教室のなかに、金属音が、ガチャリと響いた。眠りこけていた生徒がひとり、鉄の筆箱を落としたらしかった。
関係ない。名前なんて関係ない。私は意気地なしなんかじゃない。普通の家で普通に育ったことがそんなに悪いことなの？　このまま退屈な子でなどいたくない、仲間に入れてよ、学校のなかの他の奴はみんな嫌いなのだ、私のこと仲間に入れてよ。私の心がそう叫んでいるのを、私は確認するようにしてもう一度左手を眺める。
ほんとうにきれいな透き通るような肌だった。青く浮いた血管の部分がはっきりと見えた。健康的にまっすぐ生きようとしているつまらない手だった。

私は右手に力をこめる。

ピンの針が、左手に深く突き刺さった。ちくりとした痛みが全身に走る。だけど、痛みはすぐにぼんやりとして、少しだけその部分が熱くなり、おさまった。

そのままゆっくりと三文字を刻みつける。

私の右手が左手を傷つける。真ん中に座っている一個の身体を隔てて、右手と左手が別の生き物であるかのように私はかんじはじめる。

細かな皺に囲まれた細胞のひとつひとつ、鱗のような皮膚の片が、なめらかに動こうとする針先の行方を少しずつ遮り不器用にする。いや、だけどほんとうにそうなのだろうか。私の右手が力もうとするたびに、だがやめときなよと叫びながら気のりしない生き物になってしまい、その力を散らせているだけなのではないだろうか。両手を力ませながら、その中央にいる私はぼんやりしてしまう。

カの字のカーブがうまく進まない。

今度は腰が疼いた。半端に痛くて、指ではなく腰が疼いた。抉られるわけでもなく、なぞっているだけでもない。鱗の一枚一枚を剝がしていくように針先が進むとき、半端な痛さがゆっくり降りてきて腰が疼く。

教壇では厚いレンズの古い眼鏡をかけた国語教師が、突然、和歌に節をつけて歌いはじめた。

白鳥は
かなしからずや
空の青
海のあをにも……

びっくりするような大きな声だった。
私は息を飲みこみ、右手は驚いて一瞬力をとめた。教師は生徒の顔を見るでもなく、どこを見つめるでもなく、ただまっすぐ前だけを向いて猫背の背をしゃんと伸ばして、手には古びた教科書を抱えて歌いつづけている。
ほんとうはこの教師だって、こんな教室で国語を教えるなんてことに満足しているわけじゃないのかもしれない。だけど猫背で、背が小さくて、頭は真っ白で、気が弱いから、普段は小さくなって、しぶしぶ生きているのかもしれない。
彼が大きな声を張り上げるのなんて、今日のこの瞬間まで私は一度も聞いたことがなかった。おそらくみんなだってそうだ。私は彼がもっと不憫に思えてきた。
白いといえば、前の席の男の肩もまるで雪がつもっているみたいにふけで真っ白だった。みすぼらしかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com